

RS ウイルス感染症



常陸大宮済生会病院

小児科 黒岩 祐梨 先生

いわゆる“風邪”のほとんどはウイルス感染症であり、RSウイルス（respiratory syncytial virus）も、それら原因ウイルスの1つです。RSウイルス感染症は1年をとおしてみられますが、日本では秋から冬にピークを迎え、春まで流行が続きます。

1歳までに50～70%の乳児が、3歳までにほとんどの幼児がRSウイルス感染症にかかります。RSウイルスは生涯感染を繰り返しますが、2回目以降の感染では、症状が軽くなる傾向があります。

RSウイルス感染症は発熱、咳、鼻汁、喘鳴などを症状とし、発症して4～7日目に症状のピークを迎えます。比較的年齢が高い子供や大人がかかっても、鼻汁、咳、痰など一般的な風邪症状で治まりますが、新生児や乳児では細気管支炎や肺炎を引き起こします。RSウイルスは、細い気管支に炎症を起こし鼻汁や痰を増加させるため、月齢の小さい乳児では、容易に空気の通り道がふさがって呼吸が苦しくなりやすく、時に呼吸不全などの重篤な状態を起こすことがあります。早産児や心臓病などの基礎疾患がある乳児も、重症化しやすいので注意が必要です。また、家庭内に喫煙者がいる場合も重症化しやすいと報告されています。



この感染症の診断には、臨床症状や周囲の流行が根拠となり、鼻汁のRSウイルス抗原検査も利用されます。治療は、症状をやわらげる対症療法を中心とし、鼻汁の吸引、酸素投与、呼吸管理などを行います。また感染の予防としては、RSウイルスに対する抗体製剤の注射がありますが、早産児や先天性心疾患、免疫不全がある子どもなどに適応は限られます。

RSウイルスは、鼻汁や唾液を通じてヒトからヒトへ感染するため、看病する家族もマスクの着用やうがい手洗いを心がけます。先に述べたように、月齢の小さい乳児ほど重症化しやすく症状の進行も急速です。ぐったりしている、哺乳量の減少、顔色が悪い、苦しそうな呼吸などがみられる場合は、早めに医療機関を受診してください。